自主と平等の原則を固守して

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

自主と平等の原則を固守して

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

まえがき

国家の出現と共に始まった対外関係史には、一国、一民族の興亡と国際情勢の発展に消しがたい痕跡を残した出来事とエピソードが数多く記録されている。

5000年を数えるわが国の歴史にも、民族の気概を轟かせ尊厳を守った数々のエピソードが記されている。

特に、20世紀中葉に至って、自主独立国家として国際舞台に登場したわが国は、自主性を守り、他国との団結と協力を強化する上で歴史に記録される業績を積み上げた。

金日成（キムイルソン）主席は自主性は国と民族の生命であるという真理を明示し、革命を指導する全期間にわたって外部勢力の圧力と干渉を断固排し、自主的立場を堅持してきた。

金日成主席の指導の下に、朝鮮民主主義人民共和国は自主の旗印を高く掲げて、人民の要求と利益に即して全ての問題を分析・判断し、処理してきた。

こうして、わが国は自主性の強い国として、わが人民は自主的人民として尊厳を轟かせている。

自主と平等の原則に基づいて対外関係を発展させてきた不世出の偉人である金日成主席の不滅の対外活動業績を末長く伝えるべく、本書を出版する。

目　次

1．相互尊重と平等の原則を守って

1940年代末から1950年代中頃まで金日成主席が数回にわたって行ったソ連や中国への訪問、東欧社会主義諸国への訪問は、国際関係で提起される全ての問題を自主的立場に立って解決していく堂々たる主権国家の地位を力強く示した歴史的な訪問だった。

この時期、朝鮮民主主義人民共和国には経済や文化など社会の各分野において不足したものが多く、難関や試練も折り重なっていた。

全国土が廃虚と化した朝鮮戦争後にはなおさらそうだった。

金日成主席は、常に人民の底知れない精神力と創造力を絶対的に信頼し、人民大衆に依拠して革命の前途に横たわった厳しい難局を打開していった。

自分の力、自力更生が第一であり、外国の援助は付随的なものだという金日成主席の信条は確固不動なものだった。

朝鮮民主主義人民共和国は、金日成主席が示した自主の原則に基づき、大国であれ小国であれ、ひたすら自主権の相互尊重と平等、善隣・友好関係の原則に基づいて対外活動を堂々と展開することによって、兄弟諸国から朝鮮革命に対する積極的な支持と支援を受けることができた。

平等な立場で結んだ初の協定

1948年9月、ソ連は朝鮮民主主義人民共和国の創建後、世界で最初に共和国と大使級外交関係を結んだ。

金日成主席は1948年12月、モスクワに直接ソ連駐在大使を派遣した後、1949年2月22日から4月7日にかけて朝鮮民主主義人民共和国政府代表団を率いてソ連を公式親善訪問した。

主席のソ連訪問は、建国後の最初の歴史的な外国訪問であって、当時、世界各国の関心を集めた。

東方のわが国は、ソ連にとって戦略上きわめて重要な位置にあると言える。

第2次世界大戦の時期、ソ連にとって最大のウィー

クポイントは東部だった。

それゆえソ連は、ファシスト・ドイツと苦戦しながらも、日本帝国主義をはじめ帝国主義者の侵略から極東とシベリアを守るために、東部に大兵力を配備せざるを得なかった。

このような時、金日成主席は「ソ連を武力で擁護しよう！」という気高い国際主義的なスローガンを掲げ、様々の敵背撹乱作戦を行って日本のソ連侵攻企図を粉砕する上で大きな貢献をした。

それでスターリンは、多数の兵力を西部戦線に回してファシスト・ドイツに壊滅的な攻撃を加えることができた。

ところが第2次世界大戦後、ソ連の東方戦略は変わるようになった。

それは、1948年9月の朝鮮民主主義人民共和国の創建によって、社会主義の東方のとりでが強固になったからである。

スターリンをはじめソ連の指導者たちは、金日成主席を社会主義の東方のとりでを守って戦った戦友として尊敬し、朝鮮代表団を歓待した。

1949年3月5日、金日成主席はクレムリンでスター

リンと会見した。
　スターリンの手をとり、その間お変わりありませんかと挨拶した金日成主席は、朝鮮民主主義人民共和国政府代表団のメンバーを紹介した。次いで、席についた金日成主席は、朝鮮政府代表団を親切に招待し、温かく歓待してくれたことに謝意を表した後、朝鮮の状況を聞くスターリンに、万事がうまくいっている、ソ連人民の積極的な協力によって朝鮮人民が自主独立国家建設を目指す闘争で多くの成果を収めており、これに基づいて1949年から2カ年人民経済計画を遂行する道に入ることができた、と述べた。
　スターリンは主席にタバコを勧めながら、金日成首相同志の賢明な指導の下に解放された朝鮮人民が廃虚同然の国で多くのことを成し遂げた、特に日本帝国主義者によって破壊された経済を短期間に復旧したと感嘆した。そして、先に社会主義革命を遂行したソ連人民が、自分の手に主権を掌握して新しい社会建設に立ち上がった兄弟の朝鮮人民を各方面から積極的に支持・協力するのは当然の国際主義的義務だと語った。
　スターリンの好意に謝意を表した金日成主席は、

政府代表団の今回のソ連訪問中に両国間の貿易及び通商関係に関する協定を結び、ソ連の技術者をわが国に招くことなど一連の問題を解決するために技術援助と文化的協力に関する協定を締結する必要があると述べた。そして、ソ連との経済交流、文化交流が活発になる展望を考慮に入れて朝ソ国境の間に鉄道を敷設し、航空会社を設立する問題も協議することを予定していると言った。
　スターリンは、きわめて重要かつ差し迫った問題を提起した、朝鮮は国家建設を始めたばかりだから困難な点が多いだろうとし、金日成同志が提起した全ての問題に全的に同意する、と語った。
　この日の金日成主席とスターリンとの談話は、共和国の創建後、主席が外国の国家元首と行った最初の対外活動だった。
　金日成主席の対外活動は、はじめからソ連側の幹部と共和国政府代表団メンバーの熱烈な共感を呼んだ。
　3月17日、モスクワのクレムリンでは金日成主席の臨席の下、朝鮮民主主義人民共和国政府代表団とソ連政府代表団との間の第2回会談が行われた。会談終了後、協定文が完成し、次いで朝鮮民主主

義人民共和国とソビエト社会主義共和国連邦の間に経済的・文化的協力に関する協定の調印式が行われた。

協定文は５カ条からなった。朝ソ間の経済的・文化的協力に関する協定には、両国が協力・平等及び相互利益の基礎の上で通商関係を発展させ、通商及び航行に関する問題で互いに最恵待遇を適用し、文化分野において両国間にすでに結ばれた関係を発展させ、専門家と技術者の派遣その他の方法で工業及び農業分野での経験交流を促すということが規制されていた。

この協定に基づいて、1949年～1950年の商品流通に関する協定、借款に関する協定、技術協力に関する協定、文化交流と文化的協力を強めることに関する協定が締結された。

金日成主席は協定調印式で行った演説で、両国間の経済的及び文化的協力に関する協定の締結は重要な政治的出来事だとし、この協定は朝鮮史上初めて自主的な朝鮮政府が完全に平等な立場で他国の政府と締結したものだと教えた。

これらの協定によって、朝ソ両国間に結ばれた相

互協力関係が経済と文化及び科学技術の各分野にわたって全面的に拡大・発展し、正義と平和を目指す両国人民間の友好団結がいっそう強化された。

この日、クレムリンでは盛大な宴会が催された。

宴会での演説でスターリンは、朝鮮人民は民族的英雄である金日成同志を領袖として迎え、植民地の東方で最初に自分の手に主権を掌握して新しい社会の建設に踏み出した、新しい民主朝鮮の誕生でソ連の東の辺境の安全が頼もしく保証されるようになった、このような立場からソ連が朝鮮に提供する援助は厳密な意味で援助ではなく、自分のための支出だと言える、この席を共にしたソ連の同志たちはこれをはっきり認識すべきだ、と述べた。

かつてわが人民は、腐敗した無能な朝鮮封建政府が周辺の大国に対する事大と屈従外交のため従属のくびきをはめられた結果、侵略者に不平等条約の締結を強制させられ、植民地奴隷の運命に陥った。

1876年2月に朝鮮封建政府が日本の威嚇に屈服して結んだ「江華島条約」も、民族の自主権と利益を全面的に侵害された屈辱的かつ従属的な条約だった。その条約は、日本がわが国で「治外法権」や「無関

税権」、「沿海測量権」などを行使できる権利を規制した不平等条約だったのである。

1882年、米国の強制によって朝鮮封建政府が締結した「朝米条約」もやはり、わが国での米国商人の制限のない通商の承認及び保護、外交官の駐在、領事裁判権と米国に対する低率の関税の実施、朝鮮米の輸出認可、米国に対する最恵国待遇の実施などの条項からなり、わが国には一方的な義務だけを、米国には権利だけを定めた不平等条約だった。

共和国政府は、朝ソ間の経済的・文化的協力に関する協定を締結することによって、侵略的な諸大国から不平等条約の締結を重ねて強いられ、屈従と羞恥でいろどられた過去のわが国の外交史に終止符を打ち、自主的で平等な立場に立って国際政治舞台に登場し、対外活動の新たなページを開いた。

真の友人は困難な時に分かる

1956年2月のソ連共産党第20回大会は全世界を驚愕させ、国際共産主義運動と社会主義諸国に大きな思

想的混乱をもたらした。

それは、フルシチョフが大会で行った秘密報告「個人崇拝とその悪影響について」で、スターリンの功績を全面的に否定したためだった。

実際上「個人崇拝」の問題は、単にスターリン個人に対する評価問題ではなかった。それは、領袖が積み上げた業績と伝統を固守するか否か、領袖の思想と指導を継承するか否かという深刻な問題であり、したがって党と革命の将来の運命と直接関わるかなめの問題だった。

フルシチョフのこのような行為は、帝国主義者の反共騒ぎをさらにあおり立てる結果を招いた。

帝国主義者と反動勢力は1956年6月にポーランドのポズナン事件を、10月にはハンガリー事変を引き起こして国際共産主義運動に大きな難関をつくり出した。

1956年7月、フルシチョフはハンガリー内政に乱暴に干渉し、ソ連共産党第20回大会決定の貫徹を遅らせているという理由でハンガリー党・政府指導者のラーコシを罷免した。フルシチョフの大国主義的行為はハンガリーの党と政府に混乱をもたらした。労働者党指導部に潜入していたナジ一味は、同年10

月、ハンガリー反動勢力が帝国主義者の使嗾を受けて起こした反革命的デモを契機に党と国家のヘゲモニーを奪取したのち、国家安全軍を解散し、監獄から反革命分子と国家犯罪者を釈放し、ハンガリーのワルシャワ条約機構からの脱退を宣言し、ハンガリー問題を国連に持ち込んだ。

1956年6～7月の金日成主席のソ連及び東欧社会主義諸国に対する歴史的な訪問は、まさにこのような情勢の下で行われた訪問であるがゆえに世界の注目を引いた。

金日成主席は東欧社会主義諸国への訪問として最初に東ドイツを訪ねた。

東ドイツの指導者たちは自国を訪問した金日成主席に、ドイツが二分されていることからやむをえず東西ドイツがお互いに二つの国家の存在を認める方向に進むしかないという考えを披瀝した。

1956年6月8日、ドイツ社会主義統一党中央委員会庁舎を訪れた金日成主席は、ウルブリヒト第1書記から、自党は今後国連にドイツ民主共和国を承認させるとともにドイツ連邦共和国も承認するつもりだという言葉を聞いた。

主席は、ドイツ問題は国の主人であるドイツ人民の意思と利益に合わせて解決すればよいだろうと語った。

1956年6月13日、ルーマニア人民は自国を訪問するためにブカレストのバニャサーの空港に到着した金日成主席を宿所までの約4キロの沿道で熱烈に歓迎した。

金日成主席はこの日、ルーマニア労働党中央委員会第1書記や内閣首相と会見した席上で、今回ルーマニアを訪ねてルーマニアの党・政府指導者たちと対面し、ルーマニア人民が新しい社会建設で収めた成果をじかに見ることができて大変うれしい、今日のルーマニア人民の歓迎がきわめて印象的だった、わが代表団をこれほど熱烈に歓迎してくださったことに対し、あなた方を通じてルーマニア人民に感謝を送る、と語った。

第1書記は、朝鮮の貴賓に対するルーマニア人民の熱烈な友好の情には、金日成主席が導く朝鮮労働党は洗練された党であり、いささかの偏向や動揺もなく、自分の定めた道に沿ってしっかりと前進していることに対する尊敬がこもっていると言った。

金日成主席は彼に謝意を表し、われわれは長期にわたる革命闘争の実践的経験を通じて、主体性を確立してこそ朝鮮革命と建設を成功裏に推し進めることができるということを痛感した、主体性を確立しなければ風の吹くがままに右往左往し、結局全ての事を台無しにしてしまう、と述べた。

翌日の午前、金日成主席はルーマニアの複数の工場を参観したが、それらの工場では自国に必要な特殊機械を他国の設計を持ってきて生産していた。

金日成主席は、ルーマニア労働党中央委員会庁舎でルーマニアの党・政府指導者たちと会談する前の談笑で、ブカレストの工場を参観したが、ルーマニアでは経済を着実に発展させているようだ、そうすれば先進工業国の水準にすぐ追いつくことができる、われわれの経験をみても、他人に束縛されず独り立ちし、政治的自主性を堅持するためには、多少の困難があっても、経済的自立を達成することがきわめて重要だ、ルーマニアの党が自国の経済的土台を築くために力を入れているのはとてもいいことだ、と高く評価した。

金日成主席はチェコスロバキアを訪問した際、

朝鮮もセフ(コメコン)に加入して社会主義諸国の分業に参加するのがどうだろうかと言うその国の指導者たちに、朝鮮はもう少し大きくなり、力も強くなって大学生のレベルに上がってから国際分業に参加できると、論理的かつ諧謔的な表現で自主的立場と見解を披瀝し、アルバニア訪問時にも朝鮮労働党は国の大小に関わりなく全ての兄弟国が完全な平等と自主性を相互尊重する原則に基づいて友好・協力関係を発展させていくことを常に主張していると述べた。

1956年6月17日、ハンガリーを訪問した金日成主席は、自国の情勢がきわめて流動的なので好ましくない兆しが見えると不安な気持を吐露するハンガリー労働者党中央委員会第1書記ラーコシに、帝国主義者と反動勢力は滅亡する日が近づけば近づくほど最後のあがきをするものだ、しかし敵がいかに策動しても、決してハンガリー人民の選択した道を阻むことはできないだろう、と励ました。

金日成主席が1956年7月2日、ポーランド人民共和国を訪問するためにワルシャワに到着した時、この国の情勢は複雑をきわめていた。

ソ連共産党第20回大会以降、ポーランド大統領ベ

ルートが死亡すると党指導部は分裂し、党内からはベルートがつくり出した「個人崇拝」を「一掃」すべきだという「声」が上がった。これに端を発した「民主化」、「自由化」の異質な流れの中で、服役中の反革命分子らが釈放され、社会には無秩序と混乱が生じた。国内の反動勢力は党を誹謗中傷し、帝国主義者が反革命をそそのかした。

機会を窺っていた帝国主義の手先と国内の反動勢力は、金日成主席がポーランドに到着する数日前の6月28日、国際貿易市場が開かれていたポズナンを拠点に暴動を起こした。

しかし、金日成主席はポーランドの党と政府、人民に革命的な影響を与えるために身の危険をかえりみず、ポーランドを訪ねたのである。

金日成主席と会見したポーランド統一労働者党第1書記オハーブは、ポーランドの政治情勢がきわめて混乱しているにもかかわらず訪問してくださって感謝すると、自分の熱い心情を語った。

彼の言葉に金日成主席は明るい微笑を浮かべて、朝鮮には真の友人は困難な時に分かるということわざがあるが、もしわれわれがポーランドの

情勢が緊迫しているからとして他国は訪問しながらポーランドに立ち寄らないならば、あなた方は多分残念に思っただろう、兄弟国の間に情勢が少々厳しいからといって往来しないのは好ましいことではない、と言った。

そして、ポーランドの反動勢力が起こした今回のポズナン事件の際、断固たる立場を取り、早期に収拾したのはたいへん立派なことだ、帝国主義者と反動勢力はいつも弱点を狙い、すきさえあれば反革命的蠢動を企てるので、つねに革命的警戒心を高め、決してプロレタリア独裁機能を弱めてはならない、と述べた。

金日成主席は祝賀宴に参加した時にも、政治情勢と経済困難に関して不安を感じているオハーブ第1書記に、われわれ共産主義者にはいかなる難関に直面しても躊躇したり動揺する権利がない、われわれにはただ百折不撓の闘志と革命の勝利への確固たる信念を持ち、直面した難関と試練を乗り越える道のみがある、情勢が複雑をきわめている時ほど人民大衆を固く信じ、彼らの力に依拠して当面の難局を打開しなければならない、と語った。

金日成主席が1950年代中頃に行った東欧社会主義諸国に対する訪問は、それらの国の指導者たちに、国の大小をとわず自主的立場に立って、完全な平等と相互尊重の原則で国家関係を結んでこそ、社会主義勢力を強化し、世界平和を強固にすることができるという真理を銘記させた歴史的訪問である。

2．独自の判断と決心によって

1950年末から1980年代にかけて、世界の政治情勢には思想と政見、体制の違いによって多くの変化が生じた。

社会主義陣営において意見の相違が生じ、米国によるカリブ海の危機とベトナム戦争のエスカレートに対処して共同歩調を取れなかった社会主義諸国の行動の分裂、それにこれと時期を同じくして行われたニクソンの中国訪問など、世界を驚かせた数多くの政治的・軍事的大動乱と出来事が歴史に記録された。

しかし、金日成主席は情勢が複雑をきわめるほど国家関係において自主的立場を堅持し、ひたすら革命的原則、社会主義的原則に基づいて全ての問題を独自の判断と決心によって解決し、兄弟諸国への援助を国際主義的義務と見なして、国際共産主義運動の団結のために積極的に努力した。

明晰な政治論評

世界の外交史には、国際政治情勢が複雑になるたびに明晰な政治論評をもって国家間の外交紛争を調停し、情勢を安定させた事実が記録されている。

その中には、ある大国は窮地に追い込み、他の大国には勝利の月桂冠をかぶらせることによって、未曾有の驚異的出来事をもたらした政治論評もある。

当時、米国はベトナム戦争（1964・8～1973・1）の泥沼から抜け出せずに窮地に追い込まれていたし、ソ連との軍事対決でも守勢に立たされて戦略的弱勢を見せていた。このような状況下で、米国は大国のソ連や中国との関係を共に悪化させることができないことから、外交的経路を通じて中国に近づこうとする意向を示した。

新たな国際情勢に直面して中国の指導部も外交戦略を調整することにし、西欧と日本、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどとの関係を発展させるとともに、米国に接近しながら中米関

係の扉を開こうとした。

当時の米大統領ニクソンは、米国が中国を抑制・孤立させる政策を続けるならば、ソ連の攻勢に対処できなくなるという判断の下に、力の政策とパトナーシップ、対話を対外政策の三つの柱とし、まず大統領国家安全補佐官キッシンジャーに中国との接触可能性を探るよう指示した。

また米国を訪問したフランス大統領ドゴールに、米国の新たな対中国政策について中国指導部に伝えることを正式に頼むとともに、個人的にパキスタン大統領を通じて「米国は中国を孤立させるいかなる行動にも参加しないだろう」という口頭メッセージを中国指導部に伝えた。

ニクソンから一連のシグナルを受けた中国は、中断されていたワルシャワ会談を再開できるという旨を表明した。

こうして1970年1月、中米両国はワルシャワ会談を再開することを同時に発表したが、米国が引き起こしたカンボジアに対する侵略戦争のため、中米会談は再び中断された。苛立った米国は、外交的手段を動員して中国にいろいろなシグナルを送り、米第7艦

隊の台湾海峡での行動を控えるようにし、中国の国連加盟に反対する決定を取り消した。

ニクソンはその年の10月、『タイムズ』紙の記者とのインタビューで、自分が死ぬ前になすべきことがあるなら、それは中国に行くことだと、初めて中国訪問の意向を公式に表明した。

その年の12月、久しい前からの知己である米国記者スノーに会った毛沢東は、ニクソンも中国に来られるのかという彼の質問に、もしニクソンが北京に来る意向があるなら、あなたが伝えてほしい、公にせずこっそりと飛行機に乗れば来られる、ニクソンが来て口論をしようとしてもよく、しなくてもよい、旅行者として来ても大統領として来てもよい、と言った。こうしてニクソンは中米間の隔たりを縮める一連の措置を宣言し、それに対して周恩来は1971年4月末、パキスタンを通じて、中国政府は北京で米国の大統領特使または国務長官、さらには大統領本人も公に迎えて直接会談する用意があると、明確な回答を送った。

ニクソンはこの回答を受けたしばらく後、自分の特使キッシンジャーが1971年7月9日に北京入りする

だろうということを中国側に通告してきた。こうして1971年7月15日、北京とワシントンでは中米共同コミュニケが同時に発表された。そこには、周恩来とキッシンジャーが会談を行い、中国訪問を希望する米大統領ニクソンを周恩来が中華人民共和国の名で招請し、ニクソンがこの招請を快諾したという内容が反映された。

このニュースは世界に大きな衝撃を与えた。

それは、それまで国交のない国に国家元首が訪ねていった例がなく、特に今まで中国を極度に敵視していた米大統領が国交関係のない中国を訪問するからだった。

世界各国のメディアは、中国がニクソンを招いた目的と、ニクソンが国交関係のない中国を訪問する決心を下した動機について分析した論評を次々と報じた。

注目されるのは、台湾に軍事援助を与えている米国と鋭く対決していた中国が、どうして米国と妥協する道を踏み出すことができるかということだった。

一部の社会主義国は中国が米国と手を取り合ったと非難し、資本主義諸国では中国の社会主義的路線に変化が起きただの、米大統領ニクソンが外交関係

のない中国を訪問するのは世界をゆるがした出来事も同然だのといって騒ぎ立てた。

これらの論調は中国に非常に不利であるばかりでなく、社会主義諸国の団結にも支障をきたしていた。

中米接触の全過程と中米共同コミュニケに対する相異なる見解のため複雑になった国際政治情勢を鋭く見抜いた金日成主席は、1971年8月6日、わが国を訪れたカンボジアのノロドム・シアヌーク親王を歓迎する平壌市大衆集会で行った歴史的演説で、ニクソンの中国訪問計画について次のように評価した。

「これは、世界人口のほとんど4分の1を占める中国における偉大な革命的変革過程を、『力』で阻止しようと20年以上も無謀に追求してきたアメリカ帝国主義の中国敵視政策がついに完全に破綻したことを意味し、アメリカ帝国主義が世界の強大な反帝革命勢力の圧力の前についに屈服したことを物語っています。

…

ニクソンの中国訪問は勝利者の行進ではなく、敗北者の行脚であり、アメリカ帝国主義の西山落日の運命をそのまま反映するものであります。これは中国人民の大きな勝利であり、世界の革命的人民の勝利であります」

様々な論評を報じていた各国のメディアは、ニクソンの中国訪問を最も客観的に、最も科学的に分析した一つの大政治論評も同然の金日成主席の演説に接して息を殺した。

世界のどの政治家も、どの政治論評家もニクソンの中国訪問を、米国が22年ぶりに中国に白旗を掲げて訪ねていくと分析・評価することはできなかった。

金日成主席の歴史的な8月6日演説が報じられた後、大勢は一挙にして収拾された。毛沢東は居ながらにして勝利者の壇上に上るようになり、勝利者ぶって肩を怒らせていたニクソンは敗北者の境遇に陥るようになったのである。

当時、中国を訪問しようとするニクソンの本心は、米国の経済危機を克服するところにあった。

帝国主義経済危機を打開するには戦争の方法と商品市場を獲得する方法があるが、米国はそれまで戦争の方法で商品市場を確保することができなかった。米国は第2次世界大戦後、肥大化した経済の維持に必要な原料と燃料、商品市場の確保のために、1950年代か

ら1970年代に至る期間、朝鮮戦争、ベトナム戦争など世界各地で侵略と略奪戦争を展開したが、惨敗のみを繰り返し、経済危機を収拾できずにいた。

それで米国は中国との貿易を通じて経済危機を打開しようと企んでいた。

カナダ、フランス、イギリスなどが中国市場に進出しているのに、自国だけ腕をこまぬいておなかを空かす必要は何もない、だから国土が広く、人口も多い上に資源も豊かな中国と妥協して交易する方法で経済危機を打開しようというのが米国の本心だった。

国家間の対外関係には政治的関係と経済的関係があるが、基本は経済的関係を結ぶために政治的関係を結ぼうとするのが通例である。

だからニクソンは、経済的危機は政治的危機を生み、政治的危機は米国の世界戦略の破綻をもたらすということから中国への訪問を決心したのである。

中国に接近する米国のこのような本心と利害関係を誰よりも深く見抜いた金日成主席が、長くもない明晰な政治論評をもって世界世論をリードしたがゆえに、兄弟国の中国に決定的な力添えをし、友好・団結をさらに深めることができた。

帝国主義と平和共存のみを
してはならない

1970年代に至り、国際情勢は相容れない矛盾関係にある敵対的な諸大国が平和共存を標榜し、互いに近づこうとする新しい動きを見せ、それは世界の注目を引いた。

米大統領ニクソンが中国を訪問した後、中国と米国は関係正常化のための会談を始め、ソ連も迎撃ミサイル制限条約の締結のために米国との協商のテーブルについた。

中国とソ連のこのような対外政策の変化に影響された一部の国の指導者の間でも、米国と対立せず、刺激もせず、仲良くしようとする傾向が現れた。

こうした傾向は多くの社会主義国と発展途上国にも見られた。

当時、資本主義諸国では中国とソ連の動きについて、あたかも「対話」の時代、「平和会談」の時期が到来したかのように喧伝していた。

また、一部の資本主義国の共産党、労働者党の中では革命的原則から退く傾向も現れていた。

西欧のある共産党は「構造改革論」というものを持ち出して革命を放棄しようとし、アジアのある資本主義国の共産党も革命を放棄しようとして党綱領まで修正した。彼らはみな平和共存を唱え、世界には帝国主義がいなくなったとして帝国主義という言葉すらも口に出そうとしなかった。

金日成主席は、1975年5〜6月に各国を訪問した際、社会主義諸国が自主的立場に立って自国の革命を遂行し、互いに団結して反帝的立場を堅持するよう励ました。

1975年5月、主席はルーマニアを訪問する期間、ルーマニア大統領との会談と単独会談、大衆集会で行った演説で、社会主義諸国と団結しようというわれわれの原則は変わっていない、われわれは今後も引き続き団結に資することだけをすべきであって、分裂を煽るようなことはしないだろう、今日新たな戦争の危険を防ぎ、世界の恒久平和と安全を保障するためには、社会主義諸国をはじめとする世界の全ての反帝平和勢力が固く団結して帝国主義者の侵略と戦

争策動を阻止・破綻させなければならない、朝鮮は社会主義の東方のとりでであり、反帝闘争が最も熾烈な戦線である、朝鮮労働党はこの熾烈な戦線をしっかり守って社会主義偉業の遂行に寄与するだろう、と述べた。

ブルガリアを訪問した金日成主席は、6月5日、ソフィア大衆大会で行った演説では、帝国主義者の境遇は内外でいっそう困難になっている、帝国主義者は自己の境遇が困難になればなるほど、それからの活路を求めるために侵略と戦争策動を強め、懐柔欺瞞の術策にしがみついている、社会主義諸国は帝国主義の侵略と戦争政策を阻止・破綻させ、世界の平和を維持・強化するために反帝闘争を続け、帝国主義に反対するアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国人民の解放闘争を積極的に支援しなければならないとし、朝鮮人民はこれまでと同様、今後とも国際革命勢力と団結して平和と民主主義、民族的独立と社会主義共同偉業の勝利のために引き続き闘うだろうと言明した。

ブルガリア訪問についで6月6日、ユーゴスラビアを訪れた金日成主席は、ブルド夏宮殿でチトー大統

領と単独会談を行った。

チトー大統領は主席に、朝鮮民主主義人民共和国は外国の軍事基地もない自主的な国であるから、当然非同盟国家の隊列に加わる権利があると自分の見解を言った。

6月7日、両国党・政府代表団会談に参加した金日成主席は、ユーゴスラビアの指導幹部たちに会い、胸襟を開いて同志的に話し合うことができてうれしく思う、両党間には意見の相違がなく団結できる強固な基礎があるが、それはほかならぬ両党が共に自主性の原則を堅持しているからだ、と述べた。

そして、あなた方は「覇権主義に反対する」という表現を使い、われわれは「事大主義に反対する」という表現を使っているが、これは表現上異なるだけで内容は同じだとし、人間が事大主義に走れば愚か者になり、民族が事大主義に染まれば国が滅び、党が事大主義に陥れば革命と建設を台無しにしてしまう、それぞれの党はその党の思想を持っていなければならず、他の党の政策に盲目的に従えば党内に分派が発生し、党内に分派が発生すればその党は滅びるようになる、だから、わが党は党の唯一思想で

武装することを強調している、それぞれの党はその革命を立派に行うことによって国際主義に忠実であることができ、また自国の革命を立派に遂行するのは国際主義と矛盾しない、と強調した。

チトー大統領は、尊敬する金日成同志のお言葉は実に正しい、主席同志のお言葉を通じて、自主性は革命と建設において主人らしい立場と態度を堅持することで表現されるという真理をさらによく分かった、共産主義者はただ自国人民の利益のためにたたかう時こそ勝利することができるという確信を一層固めることができた、と喜びに溢れて語った。

金日成主席は、国際共産主義運動内でも団結は互いに内政不干渉の原則を第一の条件とする時にのみ実現する、兄弟党の間には高い党と低い党があり得ず、また誰も従属した生活を好まない、自主性を堅持してこそ全ての問題が解決できる、と言った。

チトー大統領は、それから2年後の1977年8月、85歳の高齢で朝鮮民主主義人民共和国を訪問し、金日成主席を国際共産主義運動の卓抜した指導者とたたえながら両国間の友好の情を深めた。

3．5万余里の外交長征

1984年5月中旬、ソ連の広大な大地の真ん中を朝鮮の特別列車が走っていた。

朝鮮の特別列車はソ連と東欧諸国から大歓迎を受け、各国から報じられる会談の成果と協定の締結に関するニュースは世界を驚嘆させた。

実に1980年代の中葉、金日成主席が特別列車に乗って約50日間にわたって行った5万余里（朝鮮の10里は日本の1里）に達する外交長征は、ソ連や東欧社会主義諸国との親善関係の発展に新たな転換をもたらし、世界の社会主義勢力が強化され、発展途上諸国の人民に世界の自主化偉業に対する信念を与えた歴史的な日々だった。

好ましからぬ関係を解消する

わが国が自国の言いなりに従わず、自主的に進むことを快く思っていなかったソ連は朝鮮を遠ざけたし、そのため朝ソ関係は疎遠になっていた。

1961年、金日成主席がソ連を訪問した際、フルシチョフは朝鮮がコメコン（セフ）に加入すればバイカル湖の附近に新しく建設された水力発電所から電力を引いて使うようにすると言った。

主席は、バイカル湖からわが国までは距離が遠いから電力を引くのは困難だとしてフルシチョフの提議を拒んだ。そして、あなたはわれわれにセフに加入しろと言っているが、欧州社会主義諸国はいずれも経済発展の水準が高いがわが国はそうでない、欧州社会主義諸国が大学生なら、われわれは幼稚園児のようなものだ、だから、われわれがどうしてセフに入ってあなた方と競争できるだろうか、われわれはセフに加入せずに自力で社会主義を建設する、これは決して民族主義ではない、われわれがソ連の援

助を受けずに自力で社会主義を建設してあなた方の負担をそれだけ減らせば、それこそ国際主義ではないか、と述べた。

1984年5月、金日成主席の乗った特別列車がシベリア横断鉄道に沿ってチタ、ウランウデ、クラスノヤルスク、ノボシビルスク、オムスクなどを通過するたびに「金日成同志の引率する朝鮮民主主義人民共和国党・国家代表団を熱烈に歓迎する！」というスローガンと共に朝ソ友好を象徴するかのように両国の国旗がはためき、群衆の熱烈な歓迎の花の海が広がり、当地の州と市の責任幹部が出迎えて祝意を表した。

1984年5月23日、金日成主席の特別列車がモスクワのヤロスラブリ駅に到着すると、ソ連の党及び政府の高位幹部の盛大な歓迎儀式が行われた。

歓迎の雰囲気に包まれた駅前広場とモスクワ市の沿道には、数多くの群衆が金日成主席の肖像画を掲げて花束と旗を振りながら割れんばかりに歓呼を上げた。

金日成主席はモスクワのクレムリンで、ソ連共産党中央委員会書記長チェルネンコの迎接を受けた。

各国のメディアは、毎日のように金日成主席のソ連訪問についてトップニュースとして報じた。

各国の新聞は「金日成主席に対するソ連側の迎接は外国元首に対する最上級のものだった。最高首脳陣が出迎えたのは今までになかったことである」と大々的に報じた。

報道の中には、わが国とソ連との友好・団結の強化において新たな歴史的契機となるだろうという声と共に、まれに朝鮮と他国間にくさびを打ち込むためのデマ報道もあり、わが国がソ連から軍事援助を受けるだろうなどの社説もあった。

当時一部の国は、米国の西欧諸国に対する中距離核ミサイルの配備に対応してソ連が核武力を強化し、東欧諸国に駐屯しているソ連軍部隊の武力装備を現代化することについて、ソ連は覇権主義を追求しているとして反対した。

金日成主席は、朝ソ関係の発展で基本は両国がアメリカ帝国主義に反対して闘うかどうかということだとし、ソ連が西欧諸国に中距離核ミサイルを配備しようとする米国の策動に反対し、それに相応する措置を取っていることに支持を表明した。

ソ連はこれについて非常に喜び、チェルネンコは金日成主席との単独会談の際、今後金日成主席がソ連に特使をはじめとする代表団を派遣すれば、いくら忙しくても自分がじかに特使と代表団に会うと約束した。

東欧諸国を歴訪して

金日成主席はポーランド、東ドイツ、チェコスロバキア、ハンガリー、ユーゴスラビア、ブルガリア、ルーマニアに対する訪問の道を歩み続けた。

金日成主席への歓迎は、東ドイツの東部ベルリンからフランクフルト—オーデルを経てドレスデンに至る道程でも、ブルガリアのソフィア人民文化宮殿で行われた大音楽・舞踊総合公演でも、そしてハンガリーとチェコスロバキア、ポーランドとユーゴスラビアなど全ての国で盛大に行われた。

主席は6月1日に行われた東ドイツの党総書記ホーネッカーとの単独会談で、両党、両国間の友好・協力関係をさらに発展させることと、相互の関心事となる問題を討議した。

この日、ホーネッカーは金日成主席に、社会主義諸国の統一団結のために努力するという自分の意向を表明した。

ハンガリーとチェコスロバキアの元首であるカーダールとフサークも金日成主席を誠意を尽くして迎え、社会主義の建設で提起される問題についての意見を交換した。

当時、ハンガリーとチェコスロバキアはいずれもセフの構成国であり、経済建設で難関に直面していた。

そのため、両国元首にとって金日成主席の訪問は、セフに加入せずに自立的民族経済を建設して、社会主義経済建設で紆余曲折を経ずまっすぐに進む朝鮮の経験に見習うことのできる、またとない貴重な機会だった。

金日成主席は、わが国はたとえセフには入らなかったが、独り立ちできるようになったのは、困苦欠乏にたえて自力で自立的民族経済を建設したからである、わが党は各時期に提起される全ての問題を自分の頭で独自に判断し対応しているとし、その実例を挙げて生々しく説明した。

金日成主席は訪問期間、東ドイツ、ブルガリアと友好及び協力に関する条約を締結した。

このように、一国の元首が広大な大陸を横断しながら訪問する各国で地球を震撼させる大歓迎を受け、社会主義陣営の全ての元首の間で一様な尊敬を受けたことはかつてなかった。

当時、金日成主席のソ連や東欧社会主義諸国に対する訪問に関する通信資料には、米国の政界人物が、ソ連や東欧社会主義諸国で朝鮮の金日成主席をあれほど熱烈に歓迎したわけが分からないと首を傾げたという資料もあった。

振り返ってみると、東欧社会主義諸国ではそれまで外国の元首が自国を訪問しても、沿道に歓迎群衆を動員したことがなかった。ソ連も同じだった。

しかし、ソ連や東欧社会主義諸国では慣例を離れて、金日成主席を盛大かつ熱狂的に歓迎したのである。

4. 団結と協力のために

金日成主席は、20世紀50年代中期のバンドン会議を契機に独自の政治勢力として国際政治舞台に登場した発展途上諸国を国際舞台で無視できない一つの反帝・自主勢力に強めるための対外活動を積極的に展開した。

1969年5月6日、金日成主席はチリ国会上院議長であったアジェンデとの会見席上で、今日の時代は国際問題が幾つかの強大国によって牛耳られていた時代でない、その時代はすでに過ぎ去った、今後、帝国主義の運命は世界人民の革命闘争如何によって左右されるだろう、と述べた。

その後、1975年5月のルーマニア訪問時にはアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国をはじめ発展途上諸国の地位を再び明らかにした。

5月24日、ルーマニア国家評議会宮殿の大会場で行われたルーマニア・朝鮮友好大衆集会での演説で

主席は、社会主義諸国は帝国主義に反対し、社会主義共同偉業のために闘うと同時に、帝国主義に反対するアジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民と世界各国の人民の解放闘争を積極的に支持・声援すべきだとし、小国、大国をとわず社会主義諸国の人民とアジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民、世界の全ての平和愛好人民がしっかり団結して闘うならば、平和と民主主義、民族の独立と社会主義の共同偉業の最終的勝利を早めることができるだろう、と指摘した。

この演説は、発展途上諸国の指導者と人民の間で大きな反響を呼んだ。

1960年代から地球上には、あたかも平壌に通じる廊下が出来たかのように、発展途上諸国の指導者がひっきりなしに平壌を訪ねた。

主席は、1960年代から1990年代初期に至るまでわが国を訪ねる発展途上諸国の指導者であればそれが小国の元首であれ、大国の元首であれ差別することなく等しく接し、チュチェ思想について、新社会建設で提起される問題について一々教えた。

発展途上諸国を社会主義勢力の力強い同盟軍として、進歩的人民の発展を促す反帝・自主勢力として

強化・発展させた金日成主席を、多くの国の指導者は熱烈に敬慕し、信頼した。

平和共存、親善・協力に基づいて

1955年4月18日、インドネシアのバンドン独立宮殿では29カ国の参加の下にアジア・アフリカ会議（第1回）が開幕した。

インドネシア大統領スカルノは「新しいアジアとアフリカの誕生」と題する開幕の辞で、この会議は人類史が始まって以来最初に開かれる有色人種の会議であり、世界歴史の新たな出発点である、植民地主義はまだ消滅せず、必ず一掃しなければならない、そのためにはアジア、アフリカの人々は必ず団結しなければならない、と語った。

会議では米国とそれに追従する国々の妨害策動を粉砕し、4月24日に29のアジア・アフリカ諸国の名による10カ条のバンドン会議原則を承認し、共同コミュニケを発表した。

会議は、諸国間の平和共存、親善・協力の基礎と

なるこの10の原則を貫くことが世界平和と安全を維持し促す上で有益な寄与をするものと確信すると宣言した。

アジア・アフリカ諸国が独自の政治勢力として国際政治舞台に登場する初の契機となったこの会議を開催する上で、主動的な役割を果たしたのはインドネシアだった。

米国は最初からアジア・アフリカ会議を快く思わず、この会議は「重大な出来事であるとは言えない」だの、「いかなる協定も締結できないだろう」だのと言い触らしながら妨害した。

これに対処してインドネシアは、各国と共に米国に断固と抗して早いうちにアジア・アフリカ会議を招集したのである。

インドネシアの反米・自主の傾向に注目していた金日成主席は1958年11月23日、中国訪問中に宿所を表敬訪問した中国駐在インドネシア大使と会見した。

当時、インドネシア大使は主席に、インドネシアは朝鮮と早急に外交関係を樹立することを望んでいると言った。

主席は、朝鮮側もインドネシアと外交関係を樹立することを望んでいる、われわれは互いに理解できる立場にあるから、外交関係の樹立問題については機が熟する時まで待つのがよかろう、発展途上諸国の団結がより重要だ、と述べた。

1964年4月16日、朝鮮民主主義人民共和国とインドネシア共和国は外交関係を樹立した。

同年11月1日、インドネシアのスカルノ大統領が平壌を訪ねた。

空港にまで出てスカルノ大統領を迎えた主席は、党中央委員会庁舎で彼と会談を行った。

主席は会談で、われわれは第2回非同盟諸国首脳会議が成功裏に行われたと思う、会議がたいへん進歩的だった、会議でスカルノ大統領閣下が素晴らしい演説を行った、反帝反植民地主義についての演説が立派だった、と述べた。

主席の言葉に謝意を表したスカルノは、帝国主義諸国の新聞は自分を非難する記事を載せたと言った。

主席は笑みをたたえて、帝国主義者が喜ぶようなら、その会議は誤った会議です、帝国主義者に好まれない会議がまことに立派な会議です、と言った。

その言葉にスカルノは感心して、「首相閣下のお言葉は私がインドネシア人民に教えるべき哲学です」とし、主席に何度も感謝を表した。

スカルノ大統領は主席に、ガネフォは発展途上諸国のスポーツ競技であり、コネフォは発展途上諸国の会議であると説明し、自分は1965年にインドネシアでコネフォを開くことを計画していると言った。

そして主席にその会議に参加してほしいと要請した。

それを快諾した主席は、そんな会議を一度開くとたいへん有益だろうと思うとし、発展途上諸国の会議を開こうとする彼の努力を支持した。

1965年4月、金日成主席は歴史的なインドネシア訪問を行った。

4月10日、スカルノ大統領は、インドネシアの首都ジャカルタ空港に到着した主席を歓迎する儀式で行った演説で、金日成首相がインドネシアを訪問するという知らせを聞いてその日を待ちこがれていた、ついに今日、金日成首相がインドネシアを訪問してくれて私はたいへんうれしく思っている、1億500万のインドネシア人民が金日成首相の到着を歓迎してい

る、金日成首相はわが国に滞在する期間、インドネシア人民が朝鮮人民との友好をいかほど熱望しているかを知ることができるだろうとし、主席の訪問を今一度熱烈に歓迎した。

主席は答礼演説で、昨年秋のスカルノ大統領の朝鮮訪問が朝鮮人民に忘れがたい深い印象を残し、両国人民の親善関係の発展において歴史的寄与をしたと評価し、われわれの今回の訪問が両国人民の間に結ばれた友好と協力関係を一層発展させ、さらにはバンドン会議精神に基づくアジア・アフリカ・ラテンアメリカ人民の団結を強化するのに資するだろうと確信すると語った。

スカルノ大統領は、金日成主席に自国の最高勲章「インドネシア共和国勲章」第1級を授与し、「金日成首相閣下、あなたはインドネシア人民の親友であり、インドネシア共和国の親友であり、私の親友であります。われわれ両国人民の永遠なる親善と朝鮮人民に対するインドネシア人民の感謝の表れとしてこの勲章を受け取ってください」と言った。

金日成主席は、スカルノ大統領が国家宮殿で催した宴会で行った演説で、インドネシア共和国が対外

政策分野で収めている成果について触れ、インドネシアはバンドン会議発起国である、スカルノ大統領とインドネシア政府は、バンドン会議精神に基づいてアジア・アフリカ・ラテンアメリカ人民の団結を強化する上で特出した寄与をしている、われわれは今回、インドネシア政府が主催するバンドン会議10周年慶祝行事が、バンドン会議精神を具現し、さらに発展させる上で新たな寄与をするものと考える、今回、帝国主義者は国連まで動かしてインドネシアに挑戦したが、インドネシア共和国が国連からの脱退を宣布することによって帝国主義者に断固たる反撃を加えた、この正しい闘争に全的な支持と連帯を送る、と語った。

これに励まされたスカルノ大統領は、バンドン市を訪れた金日成主席の臨席のもとに行われたインドネシア臨時国民協議会第3回会議で、インドネシアでの「方向転換」という政策演説を行いながら、経済的自立なくしては独立国家を建設できないという主席の命題を引用して、朝鮮人民は金日成首相閣下の賢明な指導の下に強固な自立的民族経済を建設したため、政治的にも経済的にもいかなる勢力に従属

していない、インドネシアも朝鮮の経験を学んで朝鮮のように自力更生の精神を発揮し、自立的民族経済を建設すべきだ、金日成首相閣下が今回の行事に参加したのは、自立的民族経済建設を志向するインドネシア人民にとって大きな励ましとなる、と情熱に満ちて語った。

スカルノ大統領は主席に、ボゴール宮殿の庭園にある銅像を指して、自分は朝鮮を愛するためこのような「チョンリマ銅像」を立てたと誇らしげに言った。

4月14日、大統領宮殿招待所でインドネシア共和国指導者たちに会った金日成主席は、インドネシアは富者の国である、果樹も多く、緑化も十分になされており、家屋もよく、人民は着る物に不自由していない、インドネシア人民は多くの仕事を成し遂げた、灌漑面積が広く、領土が広いのも有利な条件だ、スカルノ大統領は人口が2億～2億5千万人になっても構わないと言ったが、食べ物が豊富で、海洋資源にも恵まれており、いまだに地下資源は全部探査できずにいるはずだとし、インドネシアは経済的自立の道に進まなければならない、と述べた。

インドネシアの指導者たちは、金日成首相閣下の

お言葉を聞いてインドネシアは経済的自立ができるという自信が湧いてくると言った。

4月15日、国家宮殿ではインドネシア共和国政府とインドネシア総合大学学位・学職授与委員会の共同決定によって、金日成主席に名誉工学博士号を授与する儀式が盛大に行われた。

主席は名誉工学博士号を受けて行った演説で、数日前にインドネシア共和国の最高勲章を授かったのに、今日、インドネシアの名誉博士号を授かったのは朝鮮人民に対するインドネシア人民の友好の表示であるとし、スカルノ大統領がインドネシア人民に自力で新しいインドネシアを建設するために戦うことをアピールしたのは全的に正しいことであり、インドネシア共和国の将来の発展のためにきわめて重要な意義を持つ、自力更生の原則は革命闘争や建設事業において必ず堅持すべき基本原則の一つである、被抑圧諸民族はひたすら自分の闘争を通じてのみ真の自由と独立を達成することができる、解放された諸国の人民は自力更生して自立的民族経済を建設する方向へ進んでこそ国の政治的独立を強固なものにし、民族の繁栄を遂げることができる、と述べた。

4月18日、宿所でインドネシア共和国第1副首相兼外相に会った主席は、早く朝鮮を訪れて朝鮮の姿を見、経験を取り入れなければ自分があまり立ち遅れるようになるだろうという彼の言葉に早くわが国に来て見ることだ、未来はわれわれのものだ、アジア、アフリカは新しい勢力だ、新社会を建設するためには思想革命、技術革命、文化革命を遂行しなければならない、政治的独立後には必ず経済的独立を達成すべきだ、と述べた。

4月20日、主席に再び会ったスカルノ大統領は、「私はわが国の人民に金日成首相閣下を尊敬し欽慕し、朝鮮の模範に見習わなければならないと言っています。朝鮮に見習わなければなりません。私はわが国の人々に、指導者はいつも目と耳を開けていなければならないと言っています。これは見たことから学び、聞いたことから学ぶという意味です。私は金日成首相閣下から多くのことを見て学んでいます」と自分の心情を吐露した。

主席は彼に「学ぶというよりは共に手を取り合って進みましょう」と言った。

1965年4月、インドネシアのバンドン市ではバン

ドン会議10周年慶祝行事が行われた。

行事にはアジア、アフリカから来た38カ国の国家元首及び政府首班と代表が出席した。

金日成主席はインドネシア訪問中、バンドン会議10周年慶祝行事に参加し、アジア・アフリカ諸国の指導者との対外活動を積極的に展開して朝鮮と発展途上諸国との親善関係の発展に新たな転換をもたらした。

主席は1965年4月15日、バンドン会議10周年慶祝行事に出席するためにインドネシアを訪れるカンボジア王国国家元首ノロドム・シアヌーク親王を空港で出迎えた。

ノロドム・シアヌークは翌朝、真っ先に主席の宿所を訪ねた。

主席は彼と親しい雰囲気の中で談話した。

シアヌーク親王は10月に自分が平壌を訪れることと、主席がカンボジア青年に贈物(旋盤)を送って下さってたいへん感謝していると言った。

主席はシアヌーク親王のわが国訪問を歓迎するとし、われわれが贈ったのはほんの気持ちばかりだ、たとえ機械技術は高くないが、もっと要求するなら

提供する用意があると言った。シアヌークは、自分たちは朝鮮に追いつくことはできないとしても、朝鮮人民の選んだ道に従って進みたい自分の意志を表明した。

主席は、誰が誰に従っていくなどと言わずに、共に手を取り合って進もう、われわれはわれわれにないものをあなた方から得、あなた方はあなた方にないものをわれわれから得、また、われわれは知らないことをあなた方から学び、あなた方は知らないことをわれわれから学び、このように互いに助け合い、学び合いながら共に進もう、アジアで新興諸国が互いに協力し合って速やかに発展する必要がある、小さい国であるほどさらに団結する必要がある、と語った。

深く感動したシアヌークは、主席に何度も謝意を表した。

このときから金日成主席とノロドム・シアヌーク親王の親交の歴史が始まった。

4月16日、金日成主席はバンドン会議10周年慶祝行事に参加したベトナム民主共和国ファム・バン・ドン首相と会見した。

主席は、ベトナム問題に関するアジア・アフリカ諸国の共同声明が採択されるよう助力してほしいと言うファム・バン・ドン首相に、共同声明には南ベトナムから米軍が無条件撤退すべきだということ、ベトナム問題はベトナム人民自らが解決すべきだということを強調する必要があると述べた。

翌日再びファム・バン・ドン首相に会った主席は、アメリカ帝国主義者と戦っている複雑なベトナム情勢について分析した。

ベトナムに対するソ連の軍事援助は偽物であり陰謀があるとしながら反対する国もあるが、どうしたら良いか分からないと言う彼に、アメリカ帝国主義と戦うベトナムにわれわれは躊躇することなく可能なかぎり支援するだろうとし、ソ連の軍事援助を受けるのがよいと思う、と語った。

ファム・バン・ドン首相は、金日成主席の原則的な立場に深く感動し、ベトナム指導部にそのまま伝えると答えた。

その後、主席はベトナム戦線に飛行士を派遣してベトナム人民を支援するようにした。

4月17日、インドネシア駐在朝鮮大使館でインド

ネシア共産党中央委員会議長に会って会談した主席は、国際共産主義運動内で発生した意見相違に対する朝鮮労働党の原則的な立場と、修正主義、教条主義をはじめあらゆる左右の日和見主義に反対する闘争で朝鮮労働党が堅持している自主的な独自の路線、革命と建設で提起される原則的な問題について説明した。

4月18日、表敬訪問してきたラオス愛国戦線中央委員会議長スパヌボンに会っては、ラオス人民の愛国闘争を全的に支持・声援し、勝利は必ずラオス人民の側にある、もし朝鮮人民からの支持・声援が必要なら、われわれはこれまでと同様今後も、ラオス人民の闘争に対する支持・声援を惜しまないだろう、と言った。

主席の言葉に力づけられたスパヌボンは謝意を表し、自分たちの困難は朝鮮人民がアメリカ帝国主義侵略者に抗して戦った朝鮮戦争の時期に比べれば何でもないと言った。

主席はスパヌボンに、われわれの祖国解放戦争は凄惨なものだった、米国はわが国を地球上で消滅しようとした、しかし米国はそれを果たせず、朝鮮人

民の意気込みを挫くことができなかった、戦後復興建設も初めはきわめて困難だった、平壌には家屋が3軒しか残っていなかった、文字通り廃虚と化した、しかし、われわれは平壌を以前より一層立派で美しく建設した、もちろん国際主義的支援も助けになったが、それよりも人民の尽きせぬ力があったからだ、今後もわれわれは国際主義的義務を果たすだろう、帰国すれば闘うラオス人民と指導者たちに挨拶を伝えてほしい、と言った。

この日、宿所でアラブ連合共和国副大統領モヒディンと会見した主席は、われわれはイスラエル侵略者に反対するあなた方の政策を支持する、アラブ連合共和国の指導者たちは時間があれば朝鮮を訪ねるのがよかろう、訪問は自由と独立を目指す発展途上諸国の闘争を互いに支持し、励ますことになるだろう、われわれの関係は戦友の間柄であるので、われわれはあなた方を信じており、あなた方もわれわれを完全に信頼することができる、と述べた。

モヒディン副大統領はナセル大統領に主席の言葉を必ず伝える、朝鮮とアラブ連合共和国間の親善関係の発展のために積極的に努める、と言った。

金日成主席は、インドネシアに行く途中、ミャンマーの首都ラングンに立ち寄ってミャンマー社会主義計画党書記長サン・ユ准将と外相をはじめ高位人物に会い、サン・ユ准将に一度朝鮮を訪問するのがよい、お互いにたびたび往来してこそ顔なじみになり、互いに親密になり、相互の経験も交換し、見習うことができる、もし、あなたがわが国を公式に訪れるのが不便であるなら非公式に来てもよい、われわれはともに、かつて圧迫されていた人々である、われわれは強大国でもなく、優越感も持っていない、われわれが互いに頻繁に行き来しながら経験を交換してこそ速やかに発展することができる、と語った。

朝鮮はトラクターや工作機械など多くの近代的機械を生産する発達した国となったと羨んでいるミャンマー外相に、以前は機械に対する神秘主義があった、アジアの人々の間にはヨーロッパ資本主義諸国や日本しか機械の製作ができないと考える人が多かった、われわれは機械に対する神秘主義に反対して闘った、ミャンマー人も決心さえすれば機械を製作できる、と自信と勇気を与えた。

4月20日、金日成主席はインドネシア訪問を終えて帰国する途中、ミャンマーに再び立ち寄ってミャンマー連邦革命理事会議長ネ・ウィンに会って談話した。

主席は、ミャンマー人民が国家建設のための活動で大きな成果を収めていることを高く評価し、ミャンマーで社会改革を実施し、民族経済の土台を建設するために努めているのはたいへんよいことだ、そうしてこそ経済を発展させることができる、今回、われわれがラングンに来たのはネ・ウィン議長と顔なじみになり、民族経済建設の経験を交換し、互いに支持しながら親善関係を発展させるためだ、と言った。

そして、今回われわれは政治的問題を持って来たのではなく、知り合いになるために来た、それぞれの国は誰よりも自分の問題を一番よく知っており、それを解決することができる、あなたの活動は進歩的である、わが国も長い間植民地だったので立ち後れており、ミャンマーと同じ立場にある、民族経済なくしてはいかなる政治的独立についても語ることができない、われわれも民族経済を建設するために努めており、それに力を集中している、ミャンマーは比較的に大きな国であり、資源も豊かなので、努力すれば民族経済の土台をしっかり構築することができる、と力づけた。

金日成主席はインドネシアの訪問期間、10余の国との親善関係を新たに樹立し、アメリカ帝国主義に反対する社会主義諸国の闘いにも大いに寄与した。

互いに助け学び合いながら

金日成主席の1965年4月のインドネシア訪問以降、発展途上諸国の指導者をはじめ世界各国の代表団の平壌訪問回数は目に見えて増えた。

1966年から1970年に至る期間だけでも、ソマリア国会代表団、ギニア政府代表団、カンボジア王国民族会議代表団、モーリタニア・イスラム共和国大統領、アルバニア人民共和国内閣首相、チリ国会上院議長、南イエメン大統領、コンゴ共和国政府代表団、ブルガリア人民議会代表団、モンゴル人民大会（フラル）代表団、ポーランド国会（セイム）代表団、ルーマニア大国民議会及び国家評議会代表団、

スリランカ国会代表団をはじめとする世界各国の代表団がわが国を訪れ、金日成主席と会見した。

世界の主要通信、放送は、朝鮮を訪れる外国元首と政府及び国会代表団の数が著しく増えたことについて、1960年代後半期から朝鮮に対する世界の観点において大きな変化が生じたと広く報じた。

この時期世界各国の関心を引いたのは、金日成主席が示したチュチェ思想に基づくわが党と政府の自主路線だった。

闘う国の人民と新興独立諸国の人々は、自分らが模索していた闘争理論と社会主義の道をチュチェ思想から求め、偉大なチュチェ思想を創始し、チュチェの社会主義を建設した金日成主席を絶対的に敬慕し従うようになった。

わが国の軍事代表団がエジプトを訪れた時、エジプト大統領サーダートは、朝鮮は勇敢に戦ってアメリカ帝国主義者を打ち砕いた経験があり、日本帝国主義と長期にわたって戦った経験のある国だ、われわれは朝鮮からその経験を学ぶつもりだ、だから今後、朝鮮にエジプトの軍事代表団を多く派遣すれ

ば、朝鮮人民軍の優れた戦闘経験を教えてほしい、と言った。

また、タンザニア大統領は自国を訪問したわが国の代表団のメンバーに、自分たちは朝鮮に何も要求するものがない、ただ朝鮮で実施した教育政策と安全政策、人民軍を創建する活動で得た経験などを学びたい、と言った。

そしてベトナムは、朝鮮は地方産業工場の建設経験と社会主義建設の経験が自分たちより豊富である、ベトナムの9の州の党書記を朝鮮に送って地方産業工場の建設経験と社会主義建設経験を学ぶようにする、と提起した。

民族解放闘争を繰り広げる国や新興独立諸国はもちろん、社会主義諸国からも朝鮮を訪れるのが一つの時代の趨勢になっていた。

金日成主席は朝鮮を訪れた各国の国家元首たちと会見し、彼らが自主の道に進むように励ました。

1974年3月、朝鮮を訪れたアルジェリア首相ブーメジエンとの談話で、自力更生とは自らの力で生きることであり、他人に従属しないという意味である、ところが今、一部の人はわれわれが自力更生すると

言えば、全てを自力で生産するかのように考えているようだが、小さい国が必要な全ての物を自力で生産することは難しい、それゆえ、われわれは外国から技術や工場を買い入れている、だからといって、それが自力更生の路線やチュチェ思想に反しているとは決して言えない、と述べた。

ブーメジエンは、帝国主義とは一度たりとも妥協したことのない金日成主席閣下は偉大な方だとし、主席閣下が自ら路線を打ち出し、いささかも動揺しなかったことについて世界が一様に感嘆していると言った。

同年5月、金日成主席はわが国を訪れたセネガルのサンゴール大統領と会見した。

サンゴールは、われわれは朝鮮に学びたいと思っている、ただ朝鮮だけが社会主義を前進させており、その上創造的に発展させている、一部の社会主義国に国家建設に参考すべき文献があるのではと少し探して見たが無駄だった、だが、朝鮮では多くの文献を見つけることができ、また朝鮮の文献を見てはじめて、われわれが知りたがっていた問題を全部認識することができた、朝鮮は発展途上諸国の灯台

である、われわれが見習うべき国はただ朝鮮しかない、と言った。

1974年9月、わが国を訪れたシリアのアサド大統領との会談で金日成主席は、現在非同盟国は80カ国を超えているが、われわれも非同盟国の隊列に入ろうとすると言った。するとアサド大統領は、金日成主席の意向はとてもよい、今多くの国が主席の思想に学ぼうとするので、朝鮮が非同盟国の隊列に入るのは全会一致で可決されるだろう、と言って主席の教えを全的に支持した。

主席はアサド大統領に、昨年10月の中東戦争の時にわれわれが貴国を援助したが、困っている時に助けるのが真の友人であり、飲み友達は本当の友人ではない、と意義深く語った。

アサド大統領は、シリアが最も困難な時期に大きく助けてくれたので金日成主席を一番尊敬していると謝意を表した。

大統領は、このたび朝鮮に来る際、某国に立ち寄って武器を援助してもらおうとしたが、彼らは与えてくれなかった、金日成主席は、工業化を実現せずには政治的独立を実現することもできないと強調した

が、千万至当な言葉である、今回朝鮮を訪問して工業化の必要性をいっそう痛感した、と自分の心情を言った。

1978年4月と5月にも多くの国家元首がわが国を訪れた。彼らの訪問目的は、朝鮮人民がチュチェ思想の旗の下に社会主義建設で成し遂げた成果を直接目にして、その経験を見習うところにあった。

このように、1970年代に至ってわが国の対外関係には大きな変化が生じた。

チュチェ思想を創始した金日成主席に会い、新社会の建設で提起される問題に対する高見を得るためにアフリカのほとんど全ての元首がわが国を訪ねてきた。

モザンビークのマシェル大統領も、チュチェ思想を学ぶために1971年から1984年にかけて数回もわが国を訪れた。主席は彼に会って互いに学び合い、手を取り合って進もうと述べ、それにいたく感動した彼は、主席を長兄として慕った。

1967年10月と1974年9月にモーリタニア大統領がわが国を訪れた。

空港でダッダ大統領を出迎えた金日成主席は、訪

問中には各所を同行しながらいろいろな経験を親切に説明した。

金日成主席は1975年5月、世界の自主化を実現する上で提起される諸問題を討議し、共に手を取り合って進むためにアフリカ大陸のアルジェリアとモーリタニアを訪問した。

アルジェリアとモーリタニアの訪問中、金日成主席はこれらの国の元首との単独会談と全員会談、宴会と大衆集会で行った演説で、今日発展途上諸国の人民は世界の主人に登場し、反帝・自主の旗の下に、搾取と抑圧のない新世界を建設するための人類の前進運動を力強く推し進めている、発展途上諸国の人民は朝鮮人民の偉大な同盟者である、われわれは自らの体験を通じて自主性を堅持し、自力更生しながら勇敢に闘うならば、たとえ立ち後れていた国であっても、早いうちに繁栄する新社会を建設することができるという確信を持つようになった、と強調した。

5月28日、ハルシャ体育館で行われたわが国の党・政府代表団を歓迎するアルジェ大衆集会に出席した主席は、今日発展途上諸国人民は人類歴史

を前進させる大きな推進力となっている、これらの国が独自の政治勢力として、われわれの時代の偉大な反帝革命勢力として国際舞台に登場したのは、かつて虐げられ抑圧されていたアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国人民の歴史において新しい栄えある時代の開始となる、発展途上諸国は政治的に固く団結するばかりでなく、有無相通ずる原則に基づいて経済技術的に協力を強めるならば、強大国に依存せず短期間のうちに国の経済的自立を達成し、共同の繁栄を成し遂げることができる、世界人口と領土の大部分を占めており、無尽蔵な天然資源を持っている発展途上諸国の人民の広範な統一戦線を実現し、固く団結して闘うならば、それは全般的な国際情勢の発展に決定的な影響を及ぼすだろう、と確信を表明した。

主席のこの演説はアルジェリアだけでなく全アフリカ大陸で大きな反響を呼んだ。アフリカの通信、放送、新聞はわれ先に金日成主席の演説全文を特別報道として大々的に報じ、この演説はアフリカの国々をはじめ発展途上諸国の進むべき道を明示した大政治綱領だと強調した。

5月29日、アルジェリア革命評議会議長・アルジェリア民主人民共和国首相ブーメジエンとの2回目の単独会談では、新社会建設の経験について語りながら、アルジェリア問題はアルジェリア人が誰よりもよく知っているので主人としての姿勢をもって自国革命を推し進めるべきだと強調した。そして、発展途上諸国の団結のために非同盟国をより効果的に奮起させる方途について語り合おうとし、朝鮮が非同盟国の隊列に参加する問題について話した。

これに対しブーメジエン首相は「金日成主席閣下こそが非同盟運動内で大きな役割を果たすことのできる指導者だと思っています。金日成主席は自力更生して国の独立を成し遂げ、複雑な国際情勢の下でも動揺することなく自主性を堅持しています」と言った。

5月30日、モーリタニアに到着した金日成主席はダッダ大統領との談話で、モーリタニアではまず二つの問題を解決すべきだ、その一つはモーリタニアのほとんど全ての地域が砂漠であるだけに水の問題を解決することであり、もう一つは港を建

設することである、港を建設して船が通えば万事がスムーズに解決されるだろう、大統領が人民を愛し、人民が大統領に従うようになると、全ての問題を解決できる、これが問題解決のカギだと述べた。続けて、国の政治的独立を固める上で経済的自立はとても大きな意義を持つ、われわれの経験によると、経済的自立を実現する上で基本となるのは自らの工業を建設することだった、モーリタニアでも工業を建設し、港を建設すれば豊かに暮らすことができる、と言った。

ダッダ大統領はモーリタニアの自立的経済建設の方途を示す金日成主席に、主席閣下の言葉は自分たちを大きく励ましている、主席閣下の指摘どおりに希望と自信を持って新社会の建設に努める、と自分たちの決心を述べた。

アジア、アフリカの発展途上諸国の指導者たちは、金日成主席の指摘から国と民族の生命は自主性にあるという偉大な真理を悟った。

金日成主席は1993年と1994年にも、タイ王国国会代表団、パレスチナ国家大統領、中国全国人民代表大会代表団、ベルギー労働党代表団など世界各国

の代表団と会見し、世界の平和と自主化を実現する上で提起される諸問題を具体的に明示した。

生涯の最期の時期まで世界各国の人士に会い、彼らが自主の道に進むよう自信を与え、励まし、親しく導いた金日成主席の不滅の対外活動業績は、今日、進歩的人民を世界の自主化偉業の実現へと鼓舞激励している。

5. 時代の流れを見通して

2000年代に入り、わが国と西欧諸国との関係には急激な変化が起きた。

2000年1月4日に朝鮮とイタリアが国交を結び、その後1～2年の間にイギリス、スペイン、ドイツ、ベルギー、オランダ、カナダなど西欧のほとんどの国がわが国と国交を樹立した。

国際舞台で米国に追随していた西側諸国が米国の敵対国である朝鮮と外交関係を樹立したのは、国際政治舞台で注目に値する出来事だった。

西欧資本主義諸国のこうした対外関係の変化は、ある特定の国の主動的な発起や外部的要因によって突如として生じたのではなかった。

その根底には1970年代に早くもヨーロッパの資本主義諸国の政治情勢の発展推移を見通し、資本主義諸国で影響力のある社会党との関係を発展させるという方針を提示し、その実現を正しく導いた金日成

主席の偉大な業績が宿っている。

1970年代に入り、ヨーロッパ資本主義諸国の政治情勢の流れは変わり始めた。それぞれの国で左翼勢力である社会党の政治的影響力が大きくなったのである。ヨーロッパの共産党の中で影響力の大きい新聞を発刊している党はフランス共産党とイタリア共産党だけだったが、ヨーロッパの多くの社会党も自らの機関紙を持っており、その発行部数も多いため大衆的基盤が広かった。特に注目されるのは、ヨーロッパ諸国の社会党が自主性を主張することだった。

当時、一部の社会主義国の党は、共産党が資本主義諸国のブルジョア政党と関係を結ぶと威信が落ちるといって資本主義諸国の社会党を遠ざけ、また彼らを招く際にも党の名ではなく親善団体の名で招請し、資本主義国の社会党代表団が訪れても党の幹部が会わないのが常だった。それで、資本主義諸国の社会党はよい感情を持っておらず、招請されてもすぐ応じようとしなかった。

しかし金日成主席は、資本主義諸国の社会党はブルジョア政党なので労働者階級の党とは性格が異なっていても、共産党も社会党も同じ「党」であるから同

等の資格で接しなければならないという相互尊重の原則に基づいて対外活動を展開するようにした。

1970年代、朝鮮労働党代表団はベルギー、フランス、スウェーデン、ノルウェーなどのヨーロッパ諸国を訪問し、これらの国の社会党との関係発展のために積極的に活動した。

ベルギー社会党は、朝鮮労働党代表団がヨーロッパの真ん中で記者会見をすればヨーロッパで朝鮮の支持者、共鳴者の隊伍が増えるはずだとし、自党の会議室で国際記者会見を開くように主動的に手配した。

記者会見を通じて多くの人が口を揃えて朝鮮についての理解を新たにしたと言い、米国のUPI、フランスのAFP通信をはじめとする主要資本主義国の通信社の記者たちはわれ先に朝鮮の党代表団を自社のブリュッセル支局に招いた。

1970年代末と1980年代初めに至り、ヨーロッパ資本主義諸国で左翼勢力の社会民主党、社会党が国会選挙で勝利して政権党として登場する推移を洞察した金日成主席は、フランスとポルトガル、西ドイツの社会党との活動にも深い関心を払い、これらの国で社会党大会が行われるたびには朝鮮労働党代表団

を派遣した。

朝鮮労働党代表団は3回にわたってフランスを訪れ、フランス社会党と会談した。

朝鮮労働党代表団がフランス社会党の招きを受け、社会党大会に参加するためにフランスの西部海岸地帯のナントへ行ったことがある。

3日間にわたって行われた大会の2日目、フランス社会党党首ミッテランは朝鮮労働党の代表と談話した。彼は、金日成主席がフランス社会党大会に朝鮮労働党代表団を派遣してくれたことに謝意を表し、自分は金日成主席閣下のチュチェ思想についてよく知っている、今後フランス大統領選挙を前にして必ず朝鮮へ行って金日成主席にお会いしたいと言った。

ミッテランはその約束を守って1981年2月、わが国を訪問した。

当時はミッテランが5月に行われる大統領選挙に全力を傾けなければならない時だった。しかし、勤労大衆の自由と民主主義的権利のための一連の社会施策を実施することを選挙綱領として掲げたミッテランは、人民のための施策が国策となっている自主的な朝鮮の現実を直接見るのが選挙戦よりさらに重要

だと思い、平壌行きを決心したのである。

ミッテランは金日成主席との会見席上で、わが党では朝鮮の現実を知るためには必ず金日成主席閣下にお会いすべきだと意見の一致を見ました、と言い、金日成主席閣下は世界が公認する権威ある指導者です、と自分の心情を披瀝した。

金日成主席はヨーロッパ諸国が自主的に進むと新しい世界戦争を防止し、ヨーロッパとアジアの平和を維持し、ひいては世界の平和を維持する上で大きな助けとなるだろうと言った。

ミッテランは自分が大統領になれば発展途上諸国との活動に力を入れて、その国々の発展に寄与するとし、主席はミッテランのその決心に、私はあなたが大統領になれば発展途上諸国を援助し、新しい国際経済秩序を樹立する上で貴国がヨーロッパ先進国の先頭に立つことを望む、私は、あなたがわが国を訪問し、あなたと親善的な会談をしたことを嬉しく思う、貴党がフランスはもちろん、ヨーロッパ地域で影響力を行使することによってヨーロッパの自主化の実現に大きく寄与するものと確信する、と述べた。

ミッテランは、私は今日、主席閣下が私に多くの問

題を具体的に説明してくれたことに大いに感謝しています、私は朝鮮の国家元首である主席閣下が多くの問題に対して明晰に分析・評価した貴重なお言葉を今まで誰からも聞いたことがありません、と言った。

その後、ミッテランは帰国して5月に行われた大統領選挙で勝利し、政権を握った。

フランスで23年間の保守派政治を終わらせ、社会党政府が出現したのは、ヨーロッパの資本主義諸国の社会党が自主的に進むようにする上で大きな影響を及ぼした。

当時、米国と日本は、ミッテラン政権の出現に神経をとがらせていた。米国は、フランス政府に共産党出身の閣僚が含まれていることに対し、西側の同盟国の中で共産党員を受け入れたのは初めてのことだとして警戒した。一方、米国ではレーガンが大統領の座についたが、日本、フランス、西ドイツはもちろん、アフリカやラテンアメリカの少なくない国々も米国に従わなかった。これは、アメリカ帝国主義の影響力が弱まっていることを示していた。

1981年5月初め、朝鮮労働党代表団がポルトガルや西ドイツなどヨーロッパの資本主義諸国の社会党大

会に参加した際にも、多くの社会党党首はわが国を訪れる意向を示した。

特にポルトガル社会党党首ソアレスは、朝鮮労働党代表団団長に会った席上で、ミッテランから金日成主席閣下が偉大な指導者であることについて感銘深く聞いたとして朝鮮を訪れるという署名をし、西ドイツの社会民主党党首ブラントは第2次世界大戦の時に自分と一緒に地下闘争をした友人である、彼も朝鮮を訪れるだろう、と言った。

金日成主席は、わが国を訪れた社会党党首たちと会見し、彼らがヨーロッパを自主化する道に進むように積極的に後押しした。

6．国の大小はあっても、地位の高低はあり得ない

長期にわたって「平和的移行戦略」と「力の政策」を追求してソ連や東欧諸国の社会主義を挫折させた米国は、1990年代初め、世界の「唯一超大国」として登場した。資本主義の「勝利」と社会主義の「終焉」について喧伝した米国は、これらの変化に基づいて米国主導の新しい国際秩序を樹立しようと策動した。

しかし、朝鮮は社会主義の旗を降ろすどころか、さらに高く掲げた。

朝鮮半島は中国、ロシアのような大国と隣接しており、大陸へ通ずる橋頭堡としての特殊な地理的位置にある。米国はこのような朝鮮半島をアジア・太平洋地域の戦略的要衝と見なして、ソ連をはじめとする多くの国での社会主義の挫折を奇貨として、朝鮮民主主義人民共和国を圧殺すること

に熱を上げてきた。最初は他の社会主義国のように瓦解させようと「自己崩壊」説を喧伝したが、それが通じなくなると「核疑惑」説を新たにつくり上げた。

米国はありもしない「朝鮮の核開発疑惑」を持ち出し、「核査察」騒ぎを起こして公然たる孤立・圧殺策動に狂奔した。

しかし、「核査察」騒ぎによっても共和国を抑え付けることができなかった米国は、おびただしい兵力を動員して「チーム・スピリット93」合同軍事演習を行いつつ、「特別査察」を強行しようとした。そのため、朝鮮半島にはいつ何時戦争が起こるかわからない一触即発の危機が生じた。

世界は、「唯一超大国」になった米国に立ち向かって戦うか、さもなければ屈服するかという岐路に立たされた朝鮮に焦点を集めていた。

金日成主席は当面の情勢に対処し、国の安全と自主権を守るための断固たる自衛的措置を取るようにした。

1993年3月8日、全国、全人民、全軍に準戦時状態を宣布するという朝鮮人民軍最高司令官命令が下達

された。ついで3月12日、朝鮮民主主義人民共和国政府は核拡散防止条約から脱退することを厳かに宣言する声明を発表した。

この声明は米国にとって「爆弾宣言」のようなものだった。わが国が自分らの世界支配戦略の柱とも言える核独占戦略に大きな穴をあけるとは想像すらできなかったからである。

その柱がまるごと崩れ落ちるのを防ぐ最善の選択はわが国との対話だった。それで、朝米間の軍事対決という厚い氷の下で外交的妥結という水が流れるようになった。

その流れに乗じて1994年6月、元米大統領カーターがわが国を訪問した。

米国の第39代大統領だったジミ・カーターは、大統領退任後も一定の影響力を持って当時のクリントン米大統領をバックアップしていた。

カーターの訪朝は、米国の現・前任大統領の中で初めてわが国を訪問するという点からしても、現任大統領と親しい間柄だという点からしても世界の耳目を集めた。

カーターの訪朝ニュースが伝えられると、世界の言

論界は「カーターの訪朝はこの国が国際原子力機関からの脱退を宣言したのと時期を同じくしている」「カーターの訪朝は象徴的でありながらも悲壮な側面を持っている。米国はその外交の一時的回復のために影響力ある高官の一人であるカーターを派遣するのである」と評してカーターの訪朝に焦点を集めていた。

金日成主席がカーターをどう迎えてくれるだろうか、極に達している朝米間の核対決をどう解決していくだろうかということは、世界的な関心事となっていた。

事実上、カーターが個人の資格で平壌を訪れるとはいえ、決して米国政府と切り離しては考えられないことであった。

1994年6月15日、カーターとその一行は板門店を経由して平壌に到着した。

金日成主席は6月16日、錦繍山議事堂（当時）でカーターとその婦人をはじめとする一行に会い、彼らと共に記念写真を撮ってから談話を交わした。

カーターの平壌入りが相互の信頼を築く上で第一歩になるものとの期待を表明した主席は、今度また会えば信頼がさらに深まるだろうと述べた。

カーターは、金日成主席が平壌訪問をはからって

くれたことに深い謝意を表し、自分は個人の資格で来たが、クリントン大統領をはじめとする米国の高官たちとの合意の下で米国政府の全的な理解と権限を付与されて訪問していると言った。彼は、最近国連と国際原子力機関事務局が朝鮮問題に関して危機局面を造成したのは深刻な過ちである、今回の訪問を通じてこの危機を打開する方途を模索できるものと希望する、両国間の平和的関係の樹立と朝鮮半島の平和のために力の限り努力するつもりである、と語った。

主席はカーターに、国の大小はあっても、地位の高低はあり得ない、われわれを見下ろしたり、侮ったりしてはならず、われわれを平等に接しなければならない、と強調した。

そして、米国が騒ぎ立てる「特別査察」と「制裁」に言及し、米国はわれわれに制裁を加えると言っているが、われわれは制裁を恐れていない、これまでわれわれは制裁を受けてきたのであって、制裁を受けなかったことは一度もない、米国の制裁も受け日本の制裁も受け、他の国の制裁も受けた、今まで制裁を受けながら何のこともなかったのに、今更また制裁を続けるからといって生きていけないはずはな

い、と語った。

実際、米国は1950年12月の「敵性国貿易法」をはじめ「兵器輸出統制法」「対外援助法」「国際兵器取引規定」などをつくり上げてわが国に対する経済及び軍事制裁を加えつづけていた。これはカーター自身も認める事実だった。

カーターは、主席が朝米間の微妙な鋭い問題をためらうことなく話題に持ち出し、ざっくばらんに話してくれたことに感動して何度もうなずいた。

16日の夜、カーターは電話でホワイトハウスと連絡を取った。

カーターが電話を掛けた時刻は米国時間で6月16日の朝だった。この時、クリントンはホワイトハウスで国家安全保障会議を開き、カーターの平壌訪問とは関係なしに朝鮮問題を検討し、戦争準備を含む対応措置を最終的に決定することを討議していた。米国にとって朝鮮は依然として敵対関係の共産国家だったのである。

米国は6月15日、国連安保理の各理事国に「対朝鮮制裁決議案」を提出し、6月16日の朝にはホワイトハウスでの会議で、クリントンが国連安保理に朝鮮に

対する制裁を要求することを最終的に承認した。その時に平壌からカーターの電話が掛かってきたのである。

カーターは電話で、金日成主席との会談状況を詳しく説明し、この国には制裁が通じない、軽水炉の提供に関する朝鮮の要求は理にかなう、朝米会談を続ける必要がある等等、自分の見解を強く主張しながら、金日成主席にまた会って朝鮮に対する制裁措置を取り消すと話すつもりだが大丈夫だろうか、と聞いた。

ただいま制裁に関する問題について最終的に承認したばかりのクリントンだったが、カーターとの電話を通してそれが全く通じ得ないことだと思い、カーターの提起に同意した。

6月17日、主席と会った席でカーターは、ホワイトハウスとの昨夜の電話内容を話し、朝鮮に加えようとした制裁措置を取り消すことにしたということなど、朝米関係改善のための一連の問題においてわれわれの要求が容れられたと知らせた。

主席は、制裁措置を取り消すというならありがたいことだ、しかし、米国がそれを取り消しても取り

消さなくてもかまわない、われわれが米国に反対するのはあなたたちのせいであって、われわれのせいではない、あなたたちがわれわれを信頼しないから、われわれもあなたたちを信頼しないのだ、あなたたちはわが国をいじめてばかりいるが、いくら圧力をかけても、いびっても、われわれは十分自力で暮らしていくことができる、と語った。

この日、主席はカーターと一緒に遊覧船に乗って西海閘門へ向かった。

主席はカーターに芳しい白頭山ブルーベリー酒を杯に注いで勧め、和やかな雰囲気の中で談話を交わした。

遊覧船上では、世界屈指の西海閘門を立ち上げた奇跡のような成果から青い田畑の作柄、現国際関係の発展趨勢に至るまで、さまざまな分野の問題が話題になった。

主席は、チュチェ思想を具現するための朝鮮人民の英雄的闘争、世界の平和と人類の未来について格式ばらずに話した。

わが国の訪問を終えて帰国したカーターは、金日成主席は非常に精力的で知恵深く、全ての問

題について繊細で該博な知識を身に付けているだけでなく、限りなく大らかな人物だ、金日成主席はアメリカの建国と発展において最も名望の高いジョージ・ワシントン、トーマス・ジェファソン、アブラハム・リンカーンを合わせた以上に偉大な人物である、と賛辞を惜しまなかった。

カーターの訪朝は世界的に大きな反響を呼んだ。

インドネシア新聞『インドネシア・オブザーバー』は、カーターの訪朝結果を評し、「カーターの平壌訪問によって、金日成主席と朝鮮は大きな勝利者になった。……自分の核計画を公開するように平壌に圧力を加えようとした米国の努力を無駄にした」と報じ、ポルトガル新聞『ウ・プブリク』は、「朝鮮はカーターの平壌訪問を契機に、米国外交を大きく混乱させ、彼らの『制裁』企図を無気力なものにした。今回の過程は戦略大家としての金日成主席の知略をよく見せている」と評した。

カーターの平壌訪問後、米国は国連安保理に提出した朝鮮民主主義人民共和国に対する「制裁」の要求を正式に撤回し、朝米会談場に再び出てくるようになった。

自主と平等の原則を固守して

編　集：金順赫

翻　訳：金光哲

発　行：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行日：2025年10月

ㄱ-250880378133

E-mail: flph@star-co.net.kp

http://www.korean-books.com.kp

ISBN 978-9946-0-2609-1

9 789946 026091